

新潟生活

niigata seikatsu

第22号

2014年8月
発行

目次

教えて先輩! ● 地元三条に戻ったわけ

県内の中小企業の魅力を感じて

特集 ● ポテンシャルを秘めた“新潟のスポーツ”に注目!!

～お子様が帰省された際に親子で将来を話し合ってみてください～

教えて先輩!
vol.41

地元三条に戻ったわけ

“イタリア”との出会い

高校生の頃は地元をつまらなく感じていて、テレビや雑誌などで発信される都会に憧れを持った、普通的女子高生だったと思います。進学に関しては、先に姉が首都圏で暮らしていたこともあり、親からは「東京で刺激を受けて来なさい」と背中を押されました。

東京での学生生活は刺激的でとても楽しく、毎日を謳歌していました。そんな中、旅行でイタリアに一ヶ月程滞在したのですが、空気、色、人、私にとってすべてが新鮮な驚きだったと同時に、居心地の良さも感じる事ができたので、すっかりハマってしまいました。その経験から、卒業後はイタリアの食材を扱っている商社に就職し、ワインやパスタといったイタリア食材の販売に携わりました。しかし、次第に留学という形でイタリアに行きたいという思いが強くなったため、2年程で会社を退社することにしました。

実際、イタリアで生活を始めてみると、改めて人の思いやりや優しさに触れることができ、

益々好きになりました。また、今まで自分が見てきたことは、モノクロの世界だったのかもしれないと思うほど、モノの見方も大きく変わりました。

そして、すべての繋がりがや出会いは偶然のようでも、実は「縁」なのだと思うようになりました。「私が三条市に生まれたのも『縁』なのではないか」「頑張る場所は地元三条なのではないか」と考えるようになったため、Uターンしました。

地域を盛り上げるために

2年前から関わっているのが、三条市の「みんなのまち交流拠点 みんなくる」の運営です。「みんなくる」は三条市の中心市街地・一ノ木戸商店街にあり、将来、物販や飲食店等の開業

を目指すチャレンジショップやワーキングスペースとして活用できる、市民の交流施設です。

そこではマネージャーとして施設を運営させてもらっています。若者だけでなく、幅広い年代の方から活用してもらえるように週末はイベントを企画し、定期的に情報発信を行っています。

今、首都圏などの県外で暮らし、将来に悩んでいる人にアドバイスするとすれば、「地元を見つめ直してみる」ということです。そうすることで、新しい発見があり、「自分らしくいられる場所＝地元」ということに気付くかもしれません。



石本 史子さん (34歳)

イタリア語講師(まちなか応援マネージャー)

URL: <https://www.facebook.com/sanjo.mannaka>

高校卒業後、大学進学のために上京。在学中に何度かイタリアを訪れるうちに、憧れを抱く。卒業後はイタリア食材を扱う商社に就職。数年間勤務したのちに退社し、留学のためイタリアへ。帰国後は地元三条市にUターン。現在は三条市の商店街にある交流施設「みんなくる」のマネージャーとして、地域を盛り上げるための活動に取り組んでいる。

教えて先輩!
vol.42

県内の中小企業の魅力を感じて

県内就職を決意

私は高校時代から、中小企業のコンサルティングに興味を持ち始めたので、経営を学ぶため、加茂市にある新潟経営大学に進学しました。学生生活をとても有意義に過ごしていたのですが、就職活動が始まった頃から、地元に戻るかどうかで悩むようになりました。ただ、ずっと、様々な企業と接点を持てる仕事に就きたいという気持ちがありました。

最終的には、隣接する三条市に地場産業の魅力的な企業がたくさんあったことや、これまでの学生生活を通じて友人が増えたこと、そして、食べ物の美味しさや自然の豊かさなどといった新潟の魅力を感じていたことが決め手となり、新潟に残る決断をしました。

その後、希望する仕事ができそうな新潟県中小企業団体中央会の試験を受験し、採用してもらうことができました。実際に働き始めると、学生の4年間だけしか県内のことを知らず、また地場産業に関する知識も少なかったのが毎日が勉強

強でした。不安に思うこともありましたが、焦らずに取り組むことで、徐々に解消されていきました。

中小企業の人材確保のために

現在は、学生と地元企業をマッチングする仕事や中小企業が集まって組織する「組合」の立ち上げ支援に携わっています。

県内には、学生の皆さんが知らない企業がたくさんあるので、そういった企業を知ってもらうことで、県内の学生には県内で就職、県外に進学した学生は新潟で働こうという気持ちになって欲しいと思っています。

地元企業の方からは、特に県外に進学した学生に期待が大きいという話を聞きます。

親元を離れて一人暮らしを経験していることで、自活できる力や何らかの苦労をした経験が、仕事をするうえで役立つと考えられていて、そういう学生を積極的に採用したいという企業がたくさんあります。

仕事が休みの日は、身体を動かすことが好きなので、フットサルや山登りをして過ごしています。また、音楽を聴くことも好きなので、県内の音楽フェスに参加するなどして楽しんでいます。

新潟県で生活を始めて10年が経ちますが、まだまだ新潟の魅力を知りたいですし、その魅力を多くの人に伝えたいと思っています。



小池 哲也さん (28歳)

新潟県中小企業団体中央会勤務

URL: <http://www.chuokai-niigata.or.jp/>

札幌市出身。高校卒業まで札幌市内で過ごし、大学進学を機に新潟県へ。大学卒業後は、新潟県中小企業団体中央会に就職。現在、中小企業の人材確保・定着支援事業や中小企業からの運営相談を担当。

ポテンシャルを秘めた “新潟のスポーツ”に注目!!

今年2月に開催されたソチ冬季オリンピックでの新潟県勢のメダル獲得をはじめ、アルビレックスの活躍など、近年、新潟のスポーツは盛り上がりを見せています。

また、盛り上がりをきっかけに多くの人々がスポーツに関わるようになり、新潟のスポーツは大きな可能性を生み出しました。そこで今回は、“新潟のスポーツ”が持つポテンシャルに焦点を当て、「スポーツ研究」「ジュニア育成」「企業」の分野で新潟のスポーツに携わっている方々をご紹介します。

スポーツ研究

新潟のスポーツ環境と将来性

新潟経営大学 准教授
福田 拓哉 さん

北海道出身。高校卒業後、スポーツトレーナーを目指し、立命館大学に進学。在学中に聞いたJリーグの川淵チェアマン(当時)の講演に感動し、スポーツマネジメントの道に目標を転換。2003年には「大家友和ベースボールクラブ」の初代事務局長に就任。その後、京都パープルサンガ、福岡ソフトバンクホークスでの勤務を経て、2007年10月から新潟経営大学へ。



新潟経営大学 ホームページ <http://www.niigataum.ac.jp/>

専門はスポーツマーケティング

大学では、スポーツマーケティングを研究・指導しています。具体的には「スタジアムを満員にするための理論を明らかにする」ことが専門です。プロスポーツが中心であるため、県内はもちろんですが、全国各地や海外に足を運ぶこともあります。

また、研究・指導の一環として、2008年から読売新聞社が主催する巨人軍を対象としたビジネスプランコンテスト「ベースボールビジネスアワード」に毎年応募しています。これは、大学生から新たな集客策やビジネスモデルを募集するもので、全国から約250件の応募があります。これまでに何度も大賞や優秀賞を頂くことができましたし、昨年も2つの企画が優秀賞を受賞しました。

毎年苦労もありますが、提案したアイデアが実行されたり、試合直前の東京ドームのグラウンド上で表彰されたりするので、学生達の励みになっています。



スポーツを取り巻く環境が一変

サッカーのアルビレックス新潟ができるまでは、新潟県はサッカー不毛の地と言われていましたし、プロスポーツはありませんでした。その頃と比較すると、現在のスポーツを取り巻く環境は劇的に変わりました。

県内では、アルビレックスを中心に、野球、

サッカー、バスケットボール、スキーなど、あらゆるプロスポーツに触れることが可能であり、非常に恵まれた環境だと思います。

また、首都圏プロスポーツの場合は、チームとお客さんの間に明確な壁が存在することが多いですが、新潟の場合、チームとお客さんの距離が近く、接点を持ちやすいという特長があります。実際、ボランティアとして野球場やスタジアムの運営に毎試合携わるなど、チームに価値を見出し、チームに関わることを生き甲斐にしている人がたくさんいます。

これは、観客数や収入などの数字には表れない“深さ”であり、チーム自体に社会的価値があるということです。「勝った、負けた」「強い、弱い」「経営が苦しい、苦しくない」という次元を超えた、正に地域密着型であり、『支えるスポーツ』そのものだと思います。

サポーターとクラブの“絆”

アルビレックス新潟の場合は、Jリーグの中でも経営規模がそれほど大きい訳ではなく、J1とJ2を合わせた選手の年俸総額は17位※1です。中長期的にみると、順位を決める要因の約85%は、選手を獲得するための資金力なので、金額だけを見るとJ2に降格してもおかしくない数字です。ただ、こうした状況をサポーターが理解していて、クラブ予算の22億円(2011年度)には、サポーターを中心に組織されている後援会からの寄付金1億円が含まれています。これほど、サポーターが中心となってクラブを支え、盛り上げようとしている地域は他にありません。とても素晴らしいことだと思います。

一方、クラブ側もサポーターの支援に応えるため、寄付金の収支報告だけでなく、何を購入し、どう活用されているのかを見える化しています。それによって、サポーターはクラブに貢献できたという気持ちを持つことができます。他にも、サポーターと社長、選手、ス

タッフなどが触れ合える機会をできる限り提供しているので、そうした積み重ねがサポーターとクラブの“絆”を強固にしています。

また、サポーター側に注目すると、県内各地区に後援会があり、サポーター同士がクラブを共通の趣味や生き甲斐に、有機的につながっていることも新潟の特徴です。

※1 2005年から2011年までの平均値

スポーツで ビジネスチャンスを探る

これからは、プロスポーツを有効なツールにして、新潟県の情報を世界に発信していくべきです。例えばアルビレックス新潟は、シנגaporeのサッカーリーグにも進出しており、現地の方によく知られています。この知名度を生かし、コシヒカリや研磨技術など、新潟の良いモノと一緒に売り込むことが効果的だと考えています。

ただ、プロスポーツに頼るだけではなく、自然や文化とスポーツを融合させた新しいビジネスの創出も必要です。ポイントは、サービスの生産過程にお客さんを積極的に関与させることです。他県には、ラフティングで成功した事例がありますが、「お客さんが自らボートを漕ぐ事で達成感を得る」という能動的な関わりが成功した理由の一つです。単に乗る、見る、だけでは、お客さんは受身になってしまうので、この違いを意識しながら、ビジネスを考えることがとても重要です。

県内は川、潟、海、山などの自然環境に恵まれており、スポーツツーリズム※2やヘルスツーリズム※3で、今後、国内外から多くの人を呼び込む可能性を秘めています。新潟県がスポーツを活用し、どのように成長するのか、大いに期待しています。

※2 スポーツツーリズム…プロスポーツの観戦、スポーツイベントへの参加(例:マラソン、トライアスロン等)と開催地周辺の観光とを組み合わせた旅行スタイル

※3 ヘルスツーリズム…医学的な根拠に基づく健康維持・増進・回復を目的とした旅行スタイル

ジュニア育成

世界を見据えたジュニア世代の育成

FC下越セレノン
代表・総監督

畠山 健一 さん

新潟市で生まれてすぐ、親の転勤により、ケニアで数年間を過ごす。帰国後、山梨県韭崎市で幼稚園に通い、その頃からサッカーを始める。小学校から高校卒業までを新潟市で過ごした後、青森県内の大学に進学。卒業後は、一時期サッカーに携わったのち、新潟県内の製薬会社に就職。勤務の傍ら、ジュニア世代、高校生等のサッカー指導にあたる。現在は自営業。2012年7月、ジュニア世代を対象としたサッカーチーム「FC 下越セレノン」を設立。



〔新潟市〕

FC下越セレノン ホームページ <http://papipo.jp/hp/1340246357/>

世界で活躍する 選手を育てるために

大学卒業後、新潟市に戻ってきてからジュニア世代や高校生などのサッカーチームを指導してきましたが、そのなかで可能性を秘めていても、発揮できずに終わってしまう選手が大勢いることにもったいなさを感じていました。

また、「新潟県のサッカーを全国に知らしめるためには」、「日本のサッカーを世界で通用させるためには」と考えたときに、ジュニア世代からの育成や地域の垣根を取り払うことが必要だという考えに至りました。そこで、日本代表や世界で活躍する選手を育てようと、「FC下越セレノン」を立ち上げました。

「楽しむこと」と 「個を伸ばすこと」

ジュニア世代を指導するうえで大切にしていることは、選手が楽しんでサッカーに取り組む環境をつくる、サッカーをやっている人すべてを仲間として尊敬することです。これまでの指導は、技術を教えることは一生懸命ですが、それが「押しつけ」になり、結果として選手は「やらされている」という感覚になっていました。そこで、各選手の持っているストロングポイントを見付け、褒めて伸ばすなどしてサッカーの楽しさに気づかせ、「自分でやっている」という意識にすることで、選手の潜在能力を引き出そうと考えています。

また、現在のサッカー選手に欠けているの

は「個の力」だと思います。「個が弱ければチーム力で」という考え方もありますが、それは問題の根本的な解決にはならず、世界では戦えません。個々に能力を持った選手がチームを組んだ方が強くなる可能性が高まります。私たちのチームは個を伸ばすことを目的とし、チームの勝ち負けはその過程だと考えています。

世界からの刺激を受けて

今年の5月、FC下越セレノンがイタリアのローマで開催された世界大会「フォルクスワーゲンジュニアワールドマスターズ2014」※に日本代表として参加しました。これは、昨年開催された全国大会に優勝して出場権を得たのですが、各国の代表23チームが集まったなかで、日本の代表として参加できたことは、選手のみならず、指導者や携わった人たちすべてにとって刺激となりました。

世界大会に参加しても、自分たちのサッカー技術は通用すると感じましたが、身体の



大きさやメンタル面の差を痛感させられました。選手の意識も変化したようで、世界で活躍するには、サッカーだけではなく、語学力も必要だという思いから英会話教室に通い始めた選手もいます。様々な角度からサッカーを見れるようになってきた表れだと思います。

飛躍する可能性を秘めた 新潟のサッカー

ここ数年、新潟県のサッカーのレベルは飛躍的に向上していると感じます。要因の一つとして、指導者が努力をし、「世界」という意識を持つようになったことがあげられます。

新潟の選手たちはまだまだ伸びる余地があります。これから大切になるのは、指導する側が育成年代からの一貫した方針を持つことと、個々の指導者が海外で通用する個性的な選手を育成する意識を持つことだと思います。

私自身も、より多くの選手に世界を体感させることで、将来大きな舞台で活躍する選手を育てたいと考えています。そのために、今年の8月にドイツで開催される大会への参加や、イタリアのプロチームとのスクール提携も検討しています。そして、サッカーの楽しさを多くの子どもたちに伝えることで、新潟県のサッカー界をジュニア世代から底上げし、日本や世界で活躍する選手が多く出る強豪県にしたいと考えています。

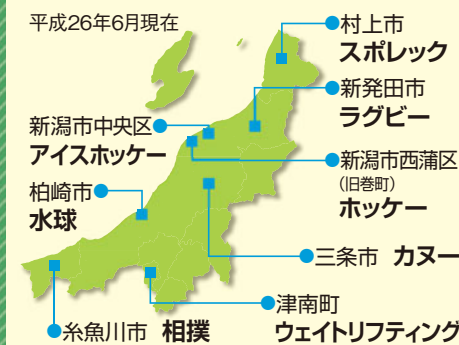
※フォルクスワーゲンジュニアワールドマスターズ…ドイツのフォルクスワーゲン本社が主催する少年サッカー大会で、2014年5月に5回目となる大会がイタリア・ローマで開催。22カ国・23チーム(ホスト国は2チーム)が参加。

広がりを見せる“新潟のスポーツ”

参考：にいがたSports.net <http://www.niigata-sports.net/>

1 地域のシンボルとなる スポーツ

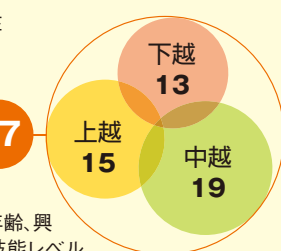
※H21「トキめき新潟国体」などを契機に



2 総合型地域 スポーツクラブ

平成26年6月現在

新潟県内
クラブ数



※地域の人々に年齢、興味関心、技術技能レベル等に応じた様々なスポーツ機会を提供する、「多目的」「多世代」「多志向のスポーツクラブ(「スポーツ基本計画」より：平成24年3月文部科学省策定)

3 スポーツ施設数

全国13位

新潟県の施設数

5,725

全国平均

4,735

※学校体育・スポーツ施設、大学(短期大学)・高等専門学校学校体育施設、公共スポーツ施設、職場スポーツ施設、民間スポーツ施設の合計(文部科学省スポーツ・青少年局スポーツ振興課「我が国の体育・スポーツ施設」、平成20年)

ポータルサイト「niiGET」では、UIターンに関する多くの情報を提供しています。

アクセス

ニイゲット

検索

企業

高い技術力で野球のユニフォーム生地を生産

(株)ハニーインターナショナル
代表取締役社長

加藤 一夫 さん

企業概要:昭和48年に4社合併による新潟経編協業組合として事業をスタート。その後、何度か変革を経たのち、平成16年から(株)ハニーインターナショナルに社名変更。アパレル用の生地を生産する「テキスタイル事業部」、野球の試合用ユニフォーム生地を生産する「ワープ事業部」、宝飾品収納ケースなどに使われるピロード風加工を行う「プラント事業部」の3事業部からなる。

株式会社 ハニーインターナショナル
ワープ事業部

〔見附市〕

(株)ハニーインターナショナル ホームページ URL:<http://www.honeyinter.com/>

自社の強みを最大限に発揮

事業を開始してからは、衣料用の生地を中心に生産していました。当時、生地を生産は大阪から近い北陸地域が中心だったので、競争に勝つため、当社では「品質管理の徹底」「納期管理の徹底」「提案型の商品開発」の三点に力を入れ、差別化を図っていました。

次第に、こうした企業努力が認められて信頼を得るようになり、ある時、取引先の大手総合商社から野球の試合用ユニフォーム生地を作ってみないかと打診がありました。当社としても年間を通じて、平均的に売り上げが期待できると考え、野球の試合用ユニフォーム生地を生産することにしました。

その頃のアメリカのメジャーリーグでは、野球を「するスポーツ」から「見るスポーツ」への転換が図られており、ユニフォームはウール生地等で作られたダボダボなものから、ニット生地のスマートなものに移行していました。そして、日本のプロ野球でもメジャーリーグの流行を取り入れるようになったため、ニット生地が主流となりました。

こうした変化の中で、全国でも数少ない「経編(たてあみ)」の編機を所有していた当社は、ストライプやメッシュ組織を作ることができるという強みを最大限に発揮し、ユニ

フォーム生地に対する様々なニーズに応えることができました。

プロ野球の6球団が採用

社名の「(株)ハニーインターナショナル」には、前社長の「世界に羽ばたこう」という思いが込められており、平成16年から使われています。

当社の主力取引先はミズノであり、メッシュのユニフォームであれば、100%当社の生地が使われています。現在、日本のプロ野球では阪神、広島、日本ハム、オリックス、ソフトバンクの5球団がミズノのユニフォームで、ナイキの西武を含めると12球団の半数の6球団が当社の生地を採用していることになります。過去には、オリンピックで野球とソフトボールの日本代表ユニフォームにも採用されていました。

ほかにも、様々なユニフォーム生地を扱っている強みを生かし、贈呈用のミニチュア版ユニフォームの販売も行っています。インターネットなどで通信販売されているミニチュア版ユニフォームは、ほとんどの商品が同一の生地で作られています。しかし、当社の場合は、ミニチュア版であっても、本物と同じ生地で作ることができるので、購入していただいたお客様からは、とても好評です。

今後の事業展開

以前、あるスポーツメーカーとタイアップして、トレーニングウェアを売り出したことがありましたが、今後も野球だけでなく、マーケットを開拓できそうな競技を見極めていかなければならないと考えています。

また、スポーツ分野以外でも、子どもや高齢者の交通事故防止用ジャケット、犬の熱中症対策ウェアなどの開発も検討しています。犬の熱中症対策ウェアは、「機能性がある」「かわいい」「メイドインジャパン」の3つの要素を満たせるよう、色々な人から具体的な意見を聞かせてもらっています。

ただ、そうは言っても、まずはオリンピック種目に野球やソフトボールが復活するなどして、大いに盛り上がりてもらい、もっと野球人口が増えることを期待しています。



Uターンの情報誌

「新潟生活」と「新潟Uターン情報」をセットで無料送付しています。

新潟生活

- 新潟にUターンした先輩の体験談
- 新潟の豊かな暮らしや魅力的な仕事の紹介など

新潟Uターン情報

- 新潟県内企業の紹介
- 就職活動の動向
- 就職ガイダンスのお知らせなど



送付をご希望の方は、ニイゲットでお申込み、又は新潟県県民生活課までお問い合わせください

新潟くらしの
ポータルサイト

ニイ GET
ニイ ゲット

も活用ください

<http://www.niiget.jp>

ニイガタビト

週替わりで「新潟人」にフォーカスした特集を掲載しています

オススメ情報

新潟のグルメ・イベントなどの口コミ情報を週5回お届けします

注目情報

長期にわたって開催されるイベントや、参加募集についてお知らせします

新潟トピックス

新潟県内の社会・経済情報を見ることができます

お申し込み・お問い合わせ

新潟県県民生活課

〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1
TEL025-280-5112(直通)

